

地域住民の投資行動と井の頭恩賜公園の観光資源化

高橋 珠州彦*

Investment Behavior of Local Residents and Tourist Resources Conversion of Inokashira Park

Suzuhiko TAKAHASHI

要旨 井の頭恩賜公園は1917（大正6）年に東京市の郊外公園として開設された。今日、観桜の名所や都市観光地吉祥寺のシンボルとしても知られる同公園は、開設当初、杉や松などが鬱蒼とした景観であり、東京市民の健康増進や児童生徒の遠足行事としての利用が中心であった。東京市主催のラジオ体操会や東京鉄道局による小学生向けの運賃割引といった取り組みが盛んに行われる一方、公園の開設以降地域住民によって桜などの献木や喫茶店出店の出願が盛んに行われていた。井の頭公園は東京市内に開設された都市公園とは異なり、郊外の公園として当初から公園利用者の休憩設備の必要性が認められていたものの、限られた公園地内での出店行動は増加する来園者の通行を妨げるとの心配が出るほどの状況であった。こうした献木や出店行動によって井の頭公園の様相は変化し、昭和10～20年代から桜名所としても紹介されるようになる。井の頭公園の観光資源化は、地域住民による積極的な関与によってもたらされた。

キーワード：郊外公園 地域住民 献木 観光資源化 公園利用

I はじめに

東京都立井の頭恩賜公園（図1：以下、「井の頭公園」とする。）は2017年5月に開設100周年を迎えた。休日を中心に大勢の来園客で賑わう井の頭公園は、現在では吉祥寺駅周辺の商業地域と相まって、地域住民のみならず多くの来訪者を引き寄せる地域のシンボルとなっている。とくに春の花見の季節には井の頭池にせり出すように咲き誇る桜を一目見ようと大勢の花見客が押し寄せ、花見の名所としても知られている。本稿では、東京市で最初の郊外公園として開設された井の頭公園がいかに関心の観光資源として変容してきたのか明らかにすることを目的とする。

日本で最初に公園の設置が法制化されたのは1873（明治6）年のことである。近代的土地制度への移行期に土地の所有者を確定する過程で、地目の一つに「公園」が創設されたことに始まる¹⁾。この時、東京に整備された浅草・芝・上野・深川・飛鳥山の五公園が制度として現れた最初の公園であるが、これらの五公園が旧来からの寺社境内や行楽地であったことから、以後の公園が「欧風」「洋風」に対して異常な執着をみせることに結びついたという²⁾。1903（明治36）年に開設された日比谷公園は、その設計段階において、「茶屋などという時代臭を感じさせる営利施設が公園内にあるのは大いに反対」「社寺境内のような公園であってはいけない」という観念的なイメージで議論が進められたという³⁾。井の頭公園が開設

* たかはし すずひこ 文教大学人間科学部非常勤講師

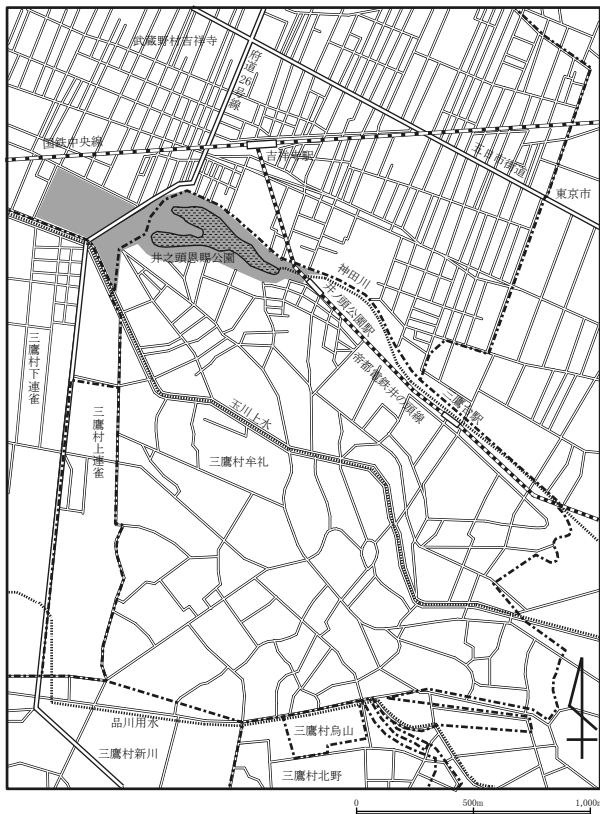


図1 井の頭公園と周辺

1939（昭和14）年発行「武蔵野町三鷹村番地入明細図」（三鷹市立図書館所蔵）に加筆

された大正期、公園の「公共性」が重視されるなか、国会議事堂に近い日比谷公園は、大正デモクラシーの象徴的な舞台にもなっていた⁴⁾。これに対し、都心から離れて開設された井の頭公園がこうした時代背景を持ちながら、どのように整備され、地域の観光資源として利用されるようになったのか検証することは都市と公園との関係を考える上で重要である。

近代における都市公園は主に都市計画学において、東京の市区改正や震災・戦災からの復興事業における公園の役割に着目して研究が蓄積されてきた⁵⁾。また造園学では近代における公園設計への関心から研究が行われてきた。とくに丸山による京都円山公園に関する研究⁶⁾は、公園開設の前史から公園の拡張に至るまで土地所有の変遷や公園開設以前の名勝との関係に着目して分析しており示唆に富む。また、小林（2016）は札幌円山

公園の変容過程を公園に対する社会的文化的認識の観点から分析し、公園成立の史的論考には場所の立地特性・場所に刻まれた履歴（時間）・関係者の場所に対する関心や働きかけの三要素を統合的に捉える視点が重要であると指摘している⁷⁾。地理学において都市公園を扱った研究は多くはないが⁸⁾、近年では中川（2015）が京都駅前広場を事例に、近代都市における公共空間が「社会的に生産された」のかという視点で分析しており、同広場には京都市の美観と消費空間という意味付けがなされていたことを明らかにしている⁹⁾。こうした先行研究は、都市における公園の意義を考察するにあたって、その公園がどのように地域に浸透し利用されてきたのかという地域からの視座が重要であることを示している。

本稿では以上の先行研究を踏まえ、東京市の郊外公園として開設された井の頭公園が変容する過程を地域社会との関係で考察する。とくに地域住民の公園への出店といった投資行動に着目し、井の頭池周辺の景観変化や公園利用の変化などを中心に分析する。井の頭公園が今日のように観桜の名所として認識されていく過程は、こうした地域住民の投資行動に依拠し、その結果、公園の利用形態が変化することで公園そのものが都市観光地「吉祥寺」の核となっていると考えられる。

II 井の頭恩賜公園の開設

1. 公園開設以前の井の頭

井の頭池が位置する武蔵野台地東端は、東に向けて徐々に勾配がゆるくなるため、地下水が湧出し、東に向いた谷をいくつも形成している¹⁰⁾。善福寺川の水源である善福寺池や石神井川の水源である三宝寺池、富士見池なども井の頭池と同様の成因によって、この付近に分布している。

井の頭池周辺は公園として整備される以前から、江戸城下に水を供給する神田川の水源としてとくに大切にされてきた。井の頭池に発した神田川は、杉並区永福町付近まで南東方向に流れ、北上した後中野区和田付近で善福寺川と、新宿区下

落合付近で妙正寺川と合流して東流する。千代田区飯田橋付近では江戸城の外堀の役割を果たし、墨田区両国付近で隅田川に流れ込む。神田上水とは、善福寺川と合流する地点から下流を指す呼び名で¹¹⁾、文京区小石川付近の分水堰から木樋によって神田や日本橋など京橋以北神田川以南の江戸城下町に飲用水を供給した。神田上水として、井の頭池の湧水が江戸城下の飲用水として利用されていたため、幕府は井の頭池と御殿山付近を直接支配した。なお井の頭池の湧水は、1898（明治31）年に淀橋浄水場が完成し近代的な水道が整備されるまで神田上水として利用された¹²⁾。

このように江戸・東京の飲用水源地として重要な役割を担った井の頭池は、1795（寛政7）年の古川古松軒『四神地名録 四之巻 多摩郡』における「井之頭弁財天之略図」¹³⁾や、1834（天保5）年の斎藤長秋『江戸名所図会十一』における「井頭池弁財天社」¹⁴⁾など、いくつかの絵画史料から近世の景観をうかがい知ることができる。これらの絵画に描かれた井の頭弁財天（図2）は、江戸の町人や役者など芸能関係の人々から信仰を集め、多くの寄進や参詣を受け入れていた。江戸からの参詣路は甲州街道の高井戸宿から現在の三鷹市牟礼を通り、井の頭池の南側にたどり着く経路であり、弁財天の入り口を示す位置に現存する道標や境内の石造物には、寄進者である江戸町人らの名前が刻まれている。

井の頭池周辺は、明治以降も東京の水源地としての管理がなされており、1971（明治4）年に一

旦東京市四谷区の実業家岩崎伝次郎に立木とも売却されながら、翌年には東京府が買い戻しを行っている¹⁵⁾。買い戻し後の井の頭池畔には杉の苗木1,000本が水源涵養林として植樹された。その後1889（明治22）年には帝室御料林として宮内省管理下におかれたが、1900（明治33）年には東京市養育院が御殿山の一部を拝借する形で感化部井之頭学校を建設した¹⁶⁾。この養育院による土地の拝借が後の井の頭池一帯の下賜に結びついたとされている¹⁷⁾。

2. 井の頭恩賜公園の開設経緯

井の頭池一帯を東京市の公園にする計画は、東京市公園改良設計調査の嘱託を受けた本多静六らが1910（明治43）年3月にまとめた調査報告書『東京市公園改良設計調査報告書』の付録「井ノ頭御料地ヲ市外公園地トスルノ件意見書」に端を発する¹⁸⁾。この意見書では、東京市の市街地発達により市外に大公園を設営する必要がある、その候補地として井の頭池周辺の御料地を提言している。また井の頭池周辺の御料地を候補とする理由として、「清冽ナル池水」と「圍繞スル鬱蒼タル樹林」が存在することを挙げている。この意見書を受け、東京市議会において1913（大正2）年に「井之頭御料地及御殿山御料地ノ無料借用ヲ申請スルモノトス」とした議案「郊外公園設置ニ関スル件」が議決され¹⁹⁾、同年12月に御料地は東京市に下賜された。下賜された井の頭池周辺が東京市井之頭公園として開設されたのは1917（大正6）年5月1日のことである。東京市域に含まれない井の頭池周辺が東京市の公園として開設されたことは、神田上水の水源地としての役割と並び、東京市との結びつきの強さを示している。

井の頭公園の開設当初の設計を示す「設計計画書」では「設計要旨」に以下のような記述がある。「本園ハ、艷美壯麗ノ勝ニ乏シク、又快活ナル広場、及眺望ナキ遺憾アルモ、宏大ナル池、及鬱蒼タル森林ノ雄大静寂ナルハ、又都市ノ郊外公園トシテ、最モ適応セル景趣ナルヲ以テ、多クノ加工ヲ為スノ要ナク、唯稍規模大ナル乗駆路ヲ開

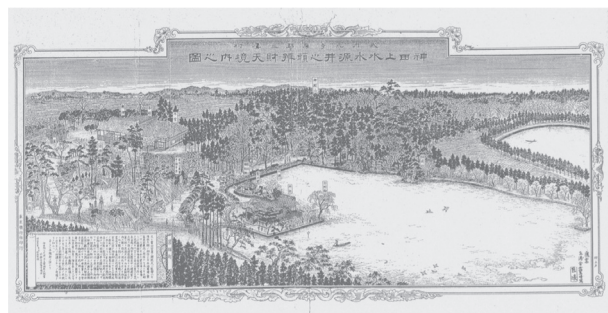


図2 銅版画『神田上水水源井之頭弁財天境内之図』
（東京都公文書館蔵）

設シ、本園ノ小瑾トスル広闊タル草地、及眺望台ノ欠クルヲ補フニ止ム」²⁰⁾

この設計要旨では、公園の設計にあたって井の頭池周辺には広場として利用可能な土地が少なく眺望もないという欠点がありながらも、鬱蒼とした森林に囲まれ静寂であることを東京市の郊外公園として評価しており、公園開設に向けて新たに加工を加える必要がないことを示している。このように鬱蒼とした森林をそのまま公園として活かすことになった井の頭公園は、開設当初交通の便が悪かった上に、兎や狐狸、蛇の出る場所として疎まれ、投身が相次ぎ、ベンチが投げ込まれる有様であったという²¹⁾。

こうした状況から、東京市民のための郊外公園として利用が促進されるよう、東京市は鉄道による利便性向上と公園設備の拡充²²⁾に傾注していた。後述するように1919（大正8）年に国鉄中央線の電化区間が中野駅から吉祥寺駅まで延伸されると、東京鉄道局と東京市は公園来訪者増加を目論んだ催し物を共同で企画している。また、1933（昭和8）年に渋谷から井の頭公園まで先行開業し、翌年吉祥寺駅まで全通した帝都電鉄は、当初から井の頭公園への来園者輸送を期待されていた²³⁾。

このように開設当初鬱蒼とした森林に囲まれていた井の頭公園は、交通の利便性が向上し公園内設備が拡充される過程で、どのように利用されてきたのか、次章以降で考察する。

Ⅲ 桜名所化以前の公園利用

井の頭公園の開設以降、公園利用者はどのように公園を利用していたのか。本章では主に桜名所として認識される以前の井の頭公園の利用に着目する。

1. 学校遠足地としての公園利用

井の頭公園が開設された当初の様子は、古写真などから読み取ることができる。図3は、井の頭公園が開設された頃の景観を写したと考えられる絵葉書である²⁴⁾。写真には鬱蒼とした杉や松など

の針葉樹林が広がり、現在の桜名所としての景観とは全く異なった様子がうかがえる。



図3 井の頭公園開園当初の景観

「井之頭恩賜公園絵葉書 大盛寺版」より
(個人蔵)

こうした森林景観が広がっていた井の頭公園は、開設当初学校遠足の目的地としてしばしば利用された。現在も井の頭公園内に残されている石碑「松本訓導受難の碑」は、開設2年後の1919（大正8）年11月20日に全校遠足として来園していた東京市麹町区の永田町小学校の児童1名が玉川上水に流されてしまい、それを救助しようとした引率教員松本虎雄が上水に飛び込んだが殉職してしまったという水難事故を伝えるものである²⁵⁾。また図4は、東京市芝区²⁶⁾の三田高等女学校・戸板裁縫学校が井の頭公園に遠足に訪れた際の記念写真の絵はがきである。井の頭公園のかつての景観を示す絵はがきは数多く発行されているが、撮影年次が明記された絵はがきは管見の限り他にはない。この記念写真は、「松本訓導受難」の事故が発生する2か月前の1919（大正8）年9月に行われた遠足の様子を伝えている。戸板裁縫学校は、1902（明治35）年に創立した私立学校で、1916（大正5）年に三田高等女学校を創設した。同校では、春と秋に東京近郊へ遠足に出かけることが定例の行事となっており、春は浅川や大磯、江の島、鎌倉、秋は村山貯水池や高尾山、奥多摩方面などに出かけた記録が学園史で確認できる²⁷⁾。井の頭公園もこうした恒例行事の目的地

として選定されたものと考えられる。写真には、杉などの針葉樹が鬱蒼と茂っており、現在とは異なった公園の様子が写されている。



図4 井の頭公園での遠足行事集合写真

「井の頭公園秋季遠足行事記念 大正八年十月
三田高等女学校・戸板裁縫学校」より
(個人蔵)

井の頭公園開設間もない時期における井の頭方面への遠足がどのように行われていたのかを示す資料に、東京女子高等師範学校附属女子高等女学校によって作成された『遠足の栞』がある²⁸⁾。1919(大正8)年に編集された同書は、凡例によると「1. 市内電車運転後凡そ一時間を経たる頃に集合地を出発し、点灯前頃に帰着し得ること²⁹⁾。2. 経費約1円50銭以内のこと。3. 徒歩行程約3里以下のこと。」という条件によって選ばれた目的地が紹介されている。紹介されている目的地は、東海道線方面、玉川電車方面、京王電車方面など鉄道路線の沿線ごとに31コースが紹介されている。井の頭公園が含まれる「中央線方面」は、「1. 中野、哲学堂」「2. 荻窪、井の頭、大番山」「3. 立川、普濟寺」「4. 百草園」「5. 高尾山」の5コースが詳細されている。

荻窪、井の頭、大番山のコースは次のような経路である。まず新宿駅から汽車を約30分乗り荻窪駅で下車し、徒歩にて荻窪駅から西へ、善福寺川の上流を横切り、井荻村と高井戸村を通して神田上水沿いに井の頭までの1里の行程をたどる。道中は、「田甫村里の間を行き、特に見るべきもの

なしと雖武蔵野の野趣を味わい郊外の秋色を賞せんには亦自ら捨てがたき風情あり³⁰⁾」とされ、井荻村、高井戸村、武蔵野村の人口や農作物などが紹介されている。井の頭池はこうした行程の中にあって唯一の見どころとして紹介されており、地質や植生、井の頭弁天や大盛寺の由緒、井の頭公園が開設された経緯などが紹介されている。さらに大番山とは、三鷹村牟礼にある小高い丘のことであるが、「大番山に登りて武蔵野原を展望するも又一興あり」「北西には井の頭池付近の森林、武蔵野村の屋敷林とその後空にある狭山の丘陵とを望見し、南東には井の頭池より流出する神田上水沿岸の地形を俯瞰し景勝の地を占む。」としている。先に紹介した永田町小学校や三田高等女学校の遠足がどのような行程をたどったか明らかにし得ないが、こうした記述から同様に武蔵野台地の秋の田園風景を見ながら井の頭公園まで歩いていたものと想定できる。

なお、1930(昭和5)年に東京府青山師範学校附属小学校教育研究会によって編集された『東京府郷土教育資料』の井の頭の頁³¹⁾には、土産物として「羊羹、絵はがき、栞、縁起饅頭、井の頭煎餅、綿製たぬき、秋の栗等」が紹介されている。

2. 鉄道会社による割引輸送

学校の遠足行事での利用の他、鉄道会社による公園利用者向けの運賃割引が行われていた。図5は東京市と国鉄東京鉄道局が共催で開催した「早起とラジオ体操の会」の広告である。発行年は不明であるが、この広告によるとラジオ体操の会は7月21日から8月25日の間、毎日朝6時から開催され、吉祥寺駅の北側に立地する東京女子音楽体操学校の教員が体操指導をしていた。このラジオ体操の会では、参加者に電車運賃の割引をする他、記念メダルの贈呈、相撲や軍事講演、漫才や奇術、盆踊り、活動写真などあらゆる催し物も開催し、参加者を集めようとしていた様子が伺われる。

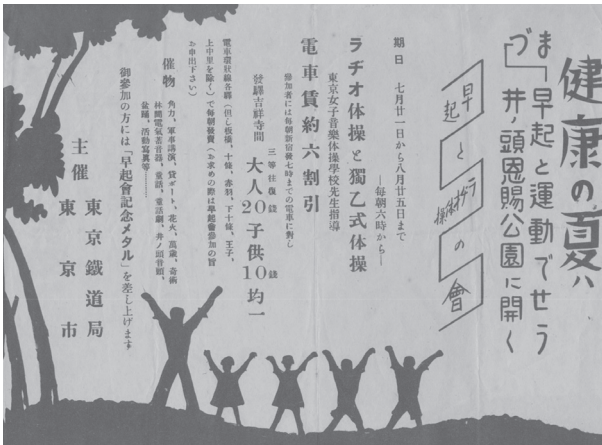


図5 「早起きとラジオ体操の会」広告
(個人蔵)

また、国鉄東京鉄道局では1935（昭和10）年ごろ東京市近郊の周遊地を指定して夏休み中の小学生に対して運賃を割引く図6のようなパンフレットを作成している。このパンフレットでは、周遊の割引地に長瀬や軽井沢、日光などが名を連ねており、井の頭公園への下車駅である吉祥寺駅もこうした周遊指定地の下車駅とされている。このように、井の頭公園の開設後は、学校の遠足行事や東京市民の健康増進を目的とした利用が促進されていたことがわかる。一方、帝都電鉄井の頭線でも井の頭公園への訪問客向けの割引を行っており、1935（昭和10）年の朝日新聞には後述のカルピス株式会社が井の頭公園内の店舗「カピー」で行う朝食会に参加する場合、朝食券付き往復運賃を大人50銭、子供30銭にする広告が掲載されて

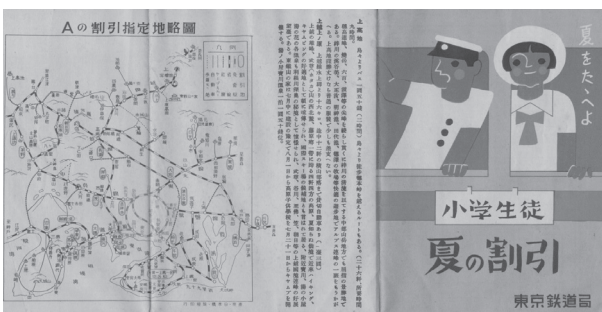


図6 東京都鉄道局発行
「小学生夏の割引」パンフレット
(個人蔵)

いる（図7）^{32）}。こうした広告資料から、公園開設後から昭和戦前期にかけて、国鉄・帝都電鉄双方共に学校行事や健康増進を目的としたラジオ体操会や朝食会など朝の行事を企画し、参加者に運賃割引や様々な特典を与え、利用客を増やす試みが行われていたことがわかる。



図7 「カルピス朝食会」広告
1935（昭和10）年8月2日朝日新聞夕刊

IV 井の頭恩賜公園の桜名所化と地域住民

東京市民の健康増進や学校行事での利用が目立っていた井の頭公園が現在のように地域のシンボルとして観光資源化するのはいつ頃なのか。本章では井の頭公園の開設に伴い周辺住民をはじめとする民間人や民間企業などから東京府に提出された各種届け出資料から公園の観光拠点化する過程を考察する。

1. 地域住民による献木と茶店の出店

1) 地域住民からの桜の献木願

井の頭池周辺が公園として開設された後、東京府に提出された「献木願」の一覧を表1にまとめた。この一覧を見ると、井の頭公園が開設された1917（大正6）年11月に2名、1918（大正7）年3月から4月に4名の出願者が確認できる。このうち最初に出願した上山三郎平が埼玉県的人物である以外、他の5名は井の頭池周辺の北多摩郡武蔵野村吉祥寺と同郡三鷹村牟礼の人物であった。寄付された樹木で最多数のものは吉祥寺の須田勘次郎出願のケヤキ100本である。このほか本数が多い樹種では、吉祥寺の富岡仙次郎が出願した吉野桜85本と十月桜15本である。ついで埼玉県児玉郡の上山三郎平が出願した枝垂桜6本が続く。富岡仙次郎出願による十月桜は冬に咲く桜であるが、その他吉祥寺の本橋長七が吉野桜3本、牟礼の石井春吉が八重咲きの牡丹桜1本を出願してお

表 1 井之頭恩賜公園開設に伴い提出された「献木願」の一覧

	出願年月日	出願者	出願者住所	植樹位置	樹種	目通り周囲寸法	長さ	本数	時価	備考
1	大正 6 年11月12日	上山三郎平	埼玉県児玉郡東児玉村北十条	(可然個所)	枝垂桜	(2年生)	6 尺	6	4 円以上	
2	大正 6 年11月27日	須田勘次郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2487		樺	2 寸	6 尺以上	100		
3	大正 7 年 3 月11日	富岡仙次郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺3141	井之頭池北側池端適宜の個所	吉野桜	5 寸	8 ・ 9 尺	85	14円内外	
4	大正 7 年 4 月20日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778		十月桜 源平藤	5 寸以上1 尺迄 1 尺	1 丈 蔓延 5 間	15 1		
5	大正 7 年 4 月20日	本橋長七	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2174	井之頭池北側池端適宜の個所	黄楊	9 寸		1	1 円	
					檜	1 尺		2	2 円	
					吉野桜	1 尺		3	3 円	
					辛夷	1 尺		2	4 円	
					合■木	8 寸		1	1 円	
6	大正 7 年 4 月27日	石井春吉	東京府北多摩郡三鷹村牟礼885	第 7 号拝借地付近	楓	5 寸		1	40銭	樹種不明
					絲檜葉	6 寸		1	1 円	
					牡丹桜	5 ■		1	50銭	
					藤	1 尺		1	3 円50銭	
3 間半に 1 間の藤 柵付										

り、出願された総献木数216本の半数以上に当たる110本が桜に属す樹木であった。桜以外の樹種でも、コブシや藤といった花を楽しむ樹木が献木されていることから、献木によって公園に彩りが添えられたことがわかる。「献木願」にはこれらの樹木が植樹された凡その位置が示されており、この範囲を図8に示した。献木の本数が最も多い富岡仙次郎による吉野桜と十月桜の植樹位置は、井の頭池の北岸である。さらに同じ北岸には本橋長七によって吉野桜3本も植樹されていることから、井の頭池の北岸には集中的に桜が植樹されたことがわかる。この他の植樹位置は安藤大助、石井春吉とも井の頭池東端であった。井の頭弁天が池の西端にあり、江戸時代の参詣者は池の南岸から井の頭弁天に参詣していたことを考えると、井の頭公園の開設に伴う桜などの献木はそれまでの井の頭池でもあまり注目されていなかった岸辺に一斉に植樹したものと見える。このことは井の頭公園開設を機に井の頭池周辺に新たな見所が作られたことを意味する。

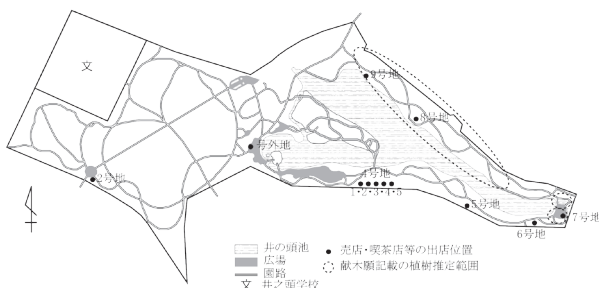


図8 井之頭恩賜公園開設期に出願された喫茶店・献木植樹等の位置

「公園使用願」「献木願」「井ノ頭恩賜公園平面図」をもとに作成
出店位置のうち、3号地・10号地・11号地の位置は資料なく不明
実測図ではないため縮尺は示さない

また、桜100本の献木を願い出た富岡仙次郎について以下の史料³³⁾が確認された。

第五式号

- 一、御依頼ノ書類別紙ノ通謄写シ差出候間御収受相成■候
- 一、吉祥寺村富岡仙次郎ヨリノ献木願■相成急速御許否被下度案ハ出願人ニ於テ植替

物ノ都合上既ニ一部分掘出シ居リ又破蕾ノ時季ニモ接近シ来リ候等（傍）以テ何分ノ御指令ヲ受度昨日当事務所へ出頭承合ノ次第モ有之候ニ付重テ御依頼申上候也

東京府北多摩郡

大正七年三月十九日

東京市役所用地課

遠藤事務員殿

この史料によると、3月に桜の献木を願い出た富岡仙次郎は、許可が下りる前に既に蕾がほころぶ時期を迎えており、一部の根を掘り返し植え替えの準備に取り掛かっていた様子が伺える。そのため、富岡仙次郎は東京府に対して早急に献木の許可を出すよう催促を行っている。

これらの史料から、これまで杉や松などの樹木を中心とした井の頭公園にまとまった数の桜が植樹され、桜名所化の基礎が築かれたのは富岡仙次郎らによって植樹が行われた1918（大正7）年春であったといえる。

2) 喫茶店等の出願

一方井の頭公園の開設以後、公園内に茶店などの出店を願い出る者も複数おり、東京市でも井の頭公園は市内の公園とは事情が異なることを認めたくて来園者の増加を理由に許可を出す方針であった。このことは以下の史料³⁴⁾で確認できる。

大正六年七月六日議決 第五百七十三号
議長殿

井ノ頭恩賜公園地使用許可ノ件

- 一 井ノ頭恩賜公園別紙図面朱線内ノ箇所概略所載数字ノ坪数ヲ標準トシテ喫茶店又ハ飲食店出願者ニ一時使用許可セントス
- 但坪数ハ地形又ハ樹木ノ存在等ニ依リ多少ノ増減アルヘキモノトス
- 一 建物ノ土台又ハ柱ノ面ヨリ使用地境界線マテ三尺以上ノ距離ヲ存スルコト

説明

井ノ頭恩賜公園開園以来遂ニ来園者夥ク其实況ヲ視察スルニ園体ノ外而モ家族的ニシテ婦人又ハ小児ヲ伴フ者若クハ婦人ノミノ来園者等以来■■ノミナラス将来益此■■ノ来園者多カルヘキ状況ニシテ其筋ニテモ既ニ休日毎時列車発車相成居候次第ニ加ヘ然ルニ同公園ハ市内公園トハ趣ヲ異ニスルヲ以テ園内ニ喫茶店又ハ飲食店等ハ一層ノ必要アルヲ認ムルヲ以テ別紙図面ノ個所候補地トシテ内定シ置キ右条ノ営業ヲ以テ使用出願者ニ一時使用ヲ許可セントス（下線は筆者加筆）

東京府に提出された「公園使用願」は12通確認できる（表2）。「公園使用願」は、いずれも1918（大正7）年1月1日出願になっており、届け出理由が「期間満了につき」となっている。管見の限りそれ以前に届けられた同種の書面は確認できないため、それ以前の公園使用に関する届け出については不明であるが、ここで確認できる12通の届け出を見る限り、井の頭公園の開設当初から既に民間に公園の使用が許可されており、その使用を継続するために提出された書類であったと考えられる。なお、12通の「公園使用願」は全て大正7年1月1日から10年間の使用期間を明記している。出願者の住所は、武蔵野村吉祥寺のものが7名、三鷹村牟礼のものが5名、その他北多摩郡内では郷地村³⁵⁾のものが3名、豊多摩郡淀橋町柏木³⁶⁾のものが1名、東京市内では神田区鍋町³⁷⁾のものが1名、日本橋区本船町³⁸⁾のものが1名となっている。全出願者のうち井の頭池に隣接する武蔵野村吉祥寺と三鷹村牟礼のものは全体の3分の2を占めている。これらのうち住所位置が判明したものを図9に示した。この図からも、井の頭公園の開設にあたって公園内に観賞目的の植栽を行い喫茶店などの営業活動を行うことで公園に彩りを加えていたのは公園周辺の地域住民たちであったことがわかる。また、武蔵野村吉祥寺では比較的吉祥寺駅に近い位置の出願者が多く、三鷹



図9 「献木願」「公園使用願」等出願者の分布

「献木願」「公園使用願」「使用地継続願」
「三鷹村土地法典」等をもとに作成
1939（昭和14）年発行「武蔵野町三鷹村番地入明細図」
（三鷹市立図書館所蔵）に加筆

村牟礼からの出願者は地域内に分散していることから、駅周辺に商業地が形成されつつあった吉祥寺地域と、農業的な土地利用が卓越し商業地化が進行していなかった牟礼地域の地域的差異としても読み取れ、興味深い。

つぎに公園使用の目的を営業の種類別にみる。公園使用の目的は、全12の出願のうち10が喫茶店であり、他の2も「菓子、サイダー、ラムネ、鮎等」となっていることから茶店や休憩所の類であったことがわかる。また使用方法の項では、多くが「建物新築」としていることが確認できる。さらに1921（大正10）年から1923（大正12）年に提出された井の頭公園内の建築物に関する届け出書類の内訳を表3にまとめた。確認できた27の書類のうち、使用を中止する届を出しているのは本橋錠治郎・窪田由太郎・上野アサの連名によって

表2 「公園使用願」の一覧

	出願年月日	出願者	出願者住所	公園内の位置	使用目的	営業の種類	坪数	使用方法	使用期間	届出理由
1	大正7年1月1日	板橋すゑ	東京府北多摩郡三鷹村牟礼字井之頭440	号外地	喫茶店	喫茶店	22	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
2	大正7年1月1日	白井藤三郎	東京市神田区鍋町25	2号地	喫茶店	喫茶店	12	公衆休憩	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
3	大正7年1月1日	石井春吉	東京府北多摩郡三鷹村牟礼885	4号地1番	喫茶店	喫茶店	20	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期限満了につき
4	大正7年1月1日	岩崎重蔵	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1873	4号地2番	喫茶店	喫茶店	20	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
5	大正7年1月1日	岩崎鎌吉	東京府北多摩郡三鷹村牟礼村1140	4号地3番	喫茶店	喫茶店	20	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
6	大正7年1月1日	植村和吉 跡部良錦 (紅林七五郎)	東京市日本橋区本松町25 東京府北多摩郡郷地村335 (東京府北多摩郡郷地村436)	4号地4・5番	公衆の休憩所	菓子、サイダー、ラムネ、鮎等	40	菓子、茶を公衆に供す	自大正7年1月1日至大正16年12月31日	期間満了につき
7	大正7年1月1日	石井キン (紅林七五郎)	東京府豊多摩郡淀橋町柏木160 (東京府北多摩郡郷地村436)	5号地	公衆の休憩所に供す	菓子、サイダー、ラムネ、鮎等	12	菓子、茶を公衆に供す	自大正7年1月1日至大正16年12月31日	期間満了につき
8	大正7年1月1日	本橋錠次郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2174	6号地	喫茶店	喫茶店	40	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
9	大正7年1月1日	窪田由太郎 上野アサ 安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1190 東京府北多摩郡三鷹村牟礼1726 東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	7号地	喫茶店	喫茶店	20	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期限満了につき
10	大正7年1月1日	富岡鉄三郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺3141	8号地	喫茶店	喫茶店	20	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
11	大正7年1月1日	本橋長七	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2174	9号地	喫茶店	喫茶店	24	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき
12	大正7年1月1日	河田八郎 安藤ハマ	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2125 東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2079	10号地	喫茶店	喫茶店	12	建物新築	大正7年1月1日より向う10年間	期間満了につき

「公園使用願」より作成

表3 公園内建築に関する願書・届類の一覧

	種別	出願・届出年月日	出願・届出人	出願・届出人住所	公園内の位置	建物用途	備考
1	新築願	大正10年2月7日	山田定雄	東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷514	11号地	売店	
2	使用地継続願	大正11年2月 日	板橋すゑ	東京府北多摩郡三鷹村牟礼字井之頭440	4号・5号地	喫茶店開設 喫茶店開設	
3	使用地継続願	大正11年2月10日	山崎又蔵 安藤純祐				
4	建物新築設計変更願	大正11年2月14日	小田末吉	東京市浅草区永住町84	1号地	喫茶店	
5	使用地継続願	大正11年2月15日	岩崎重蔵	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1873	4号地2番	喫茶店開設	
6	使用地継続願	大正11年2月16日	本橋長七	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2174		喫茶店開設	
7	使用地継続願	大正11年2月17日	河田八郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2125			
8	使用地継続願	大正11年2月17日	浅野釧太郎	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1148	3号地	喫茶店開設	
9	使用地継続願	大正11年2月17日	松本長次郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	4号地3番	喫茶店開設	
10	使用地継続願	大正11年2月17日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺3141	7号地	喫茶店開設	
11	使用地継続願	大正11年2月18日	富岡鉄三郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺3141	8号地	喫茶店開設	
12	公園使用廃止届	大正11年2月20日	安藤ハマ (右ハママ夫 安藤與平治)	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2079	10号地	喫茶店開設	
13	公園使用廃止届	大正11年2月22日	本橋錠治郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2174	6号地	喫茶店	建物を笠原久八へ売渡のため 使用廃止
14	使用地継続願	大正11年2月23日	窪田由太郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1190			
15	使用地継続願	大正11年2月23日	上野アサ	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1726	1号地	喫茶店	
16	使用地継続願	大正11年2月23日	小田末吉	東京市浅草区永住町84	2号地	喫茶店開設	
17	使用地継続願	大正11年2月23日	白井藤三郎	東京市神田区錦町25		喫茶店開設	
18	公園使用地内建物増設願	大正11年2月24日	笠原久八	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺2114	5号地	喫茶店開設	
19	使用地継続願	大正11年2月24日	坂本亀吉	東京府北多摩郡武蔵野町吉祥寺2202	7号地	喫茶店	8坪増築出願のところ不取敢
20	使用地継続願	大正11年2月24日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	11号地	喫茶店	
21	使用地継続願	大正11年2月28日	山田定雄	東京府豊多摩郡渋谷町大字下渋谷514	4号地1番	喫茶店	地形南面丘状ヲナシ降雨ノ場合ハ雨水屋内ニ流入シ営業上ニ非常ニ師匠ヲ来シ誠ニ困難
22	自費加工願	大正11年2月28日	石井長蔵	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1018	7号地	喫茶店	喫茶店営業に支障があるため 建設
23	使用地内吹却建設願	大正11年3月10日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	4号地2番	喫茶店	濡縁と6尺×3間の日覆新設
24	公園使用地内建物模様替願	大正11年5月10日	岩崎重蔵	東京府北多摩郡三鷹村牟礼1873	7号地	喫茶店	1間×4間の日覆
25	使用地内四方屋建設願	大正11年5月6日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	4号地3番	喫茶店	
26	使用地内日覆設備願	大正11年6月24日	松本長次郎	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺	7号地	喫茶店	
27	喫茶店建設竣工届	大正11年7月8日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	7号地	喫茶店	
28	喫茶店建築変更願	大正11年7月8日	安藤大助	東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺1778	7号地	喫茶店	
29	建物建築変更願	大正11年9月6日	山田定雄	豊多摩郡渋谷町大字下渋谷514	11号地	喫茶店	
30	建物竣工届	大正12年4月13日	山田定雄	東京府豊多摩郡渋谷町大字下渋谷514	11号地	喫茶店	

「新築願」「使用地継続願」「公園使用廃止届」「建物増設願」等より作成

出された「公園使用廃止届」のみである。多くを占めるのは「使用地継続願」であり、15の届け出が確認できた。なお、3名が連名で提出した「公園使用廃止届」の廃止理由には、喫茶店の建物を新たな所有者である笠原久八に売り渡すことが挙げられており、新たな所有者となった笠原久八はこの廃止届提出の翌日付けで喫茶店開設を用途とした「使用地継続願」を提出している。「使用地継続願」の提出者を見ると、表2で確認した「公園使用願」の提出者17名と一致する人物のほか、に8名の提出者名が確認できる。このことから、1917（大正6）年の井の頭公園開設後わずか5年の間にのべ25名もの人々が公園使用を願い出たことがわかり、そのほとんどが武蔵野村吉祥寺と三鷹市牟礼の人々であった。

こうした人物のなかから複数の届け出を行っている安藤大助は、表3の通り、1918（大正7）年1月1日に井の頭池東端の7号地に喫茶店の建物新築を目的として「公園使用願」を提出している。同氏は4年後の1922（大正11）年2月17日に喫茶店の開設を理由として「使用地継続願」を提出している。その翌週の2月24日には喫茶店の建物を8坪増築しようと「公園使用地内建物増設願」を提出した。

さらに翌3月10日には「自費加工願」として改築を願い出ている。その理由は敷地の南側が斜面であることを挙げ、「地形南面丘状ヲナシ降雨ノ場合ハ雨水屋内ニ流入シ営業上ニ非常ニ師匠ヲ来シ誠ニ困難」と、降雨時の浸水に悩まされていることを訴えている。さらにその2カ月後の5月6日には「公園使用地内建物模様替願」を提出し、濡縁と6尺×3間の日覆の新設を出願し、さらに7月8日には「喫茶店建設竣工届」とあわせて「使用地内日覆設備願」で1間×4間の日覆の新設を願い出ている。こうした安藤大助の意欲的な店舗の増改築に対して、東京府には1922（大正11）年2月27日付けの「建物増設願供覧ノ件」と題した以下の史料が確認できる³⁹⁾。

建物増設願供覧ノ件

井ノ頭恩賜公園地第七号使用人安藤大助ヨリ別紙ノ通建物増築出願乃処右ハ土地ヲ増使用セシメサルヘカラサルモノニシテ同所昨年水泳場設置以来一層狭隘ヲ告ケ居ルハ事実ナルモ他ノ使用地モ狭隘ヲ感シ居折柄ナレハ之ヲ許可スルモノトセハ続々之ニ倣ヒ増使用出願スルモ測リ難ク若シ出願アリタル際ハ孰モ之ヲ許可スヘキヤ否攻究ヲ要スヘキ問題ニシテ此点ニ付方針ノ決定ヲ得処理スヘキモノナルヲ以テ不取敢一覽ニ供ス

この史料を見ると、氏の建物増設願に対して東京府が許可を出すことで、次々に他の建物でも増築願が続けて出されることを危惧している様子が伝わって来る。東京府ではこうした理由から「不取敢一覽ニ共ス」と結論づけている。この史料が示すように、井の頭公園では1921（大正10）年に設置された天然水利用の水泳場を目当てにやってくる来園客のために大変な混雑の状態になっていた。安藤大助による増改築の届け出は、こうした急増する来園者を自らの喫茶店に取り込もうとする意欲の表れでもあったが、限られた敷地内において、東京府を悩ます状況となっていたものといえる。

2. 昭和初期の「桜名所」化

1) 企業による出店

昭和に入ると、地域住民のほか企業による出店が行われた。カルピス製造株式会社による直営喫茶店「カピー」は1934（昭和9）年5月に井の頭公園駅前に開業した⁴⁰⁾。カルピス製造株式会社は1917（大正6）年に乳酸菌飲料を製造するラクトー株式会社として東京市本郷区駒込林町⁴¹⁾に設立した企業である。「カピー」は乳酸菌飲料の「カルピス」を販売促進する目的で1933（昭和8）年12月に東京市四谷区新宿の三越付近に一号店を出店したカルピス製造株式会社の直営喫茶店である。井の頭公園駅の開業後わずか1年後で、

帝都電鉄井の頭線が吉祥寺駅まで全通したばかりの井の頭公園駅前にいち早く出現した「カピー」2号店は、都心方面からの誘客に大きく貢献したものと想像される。Ⅲで紹介した図7は1935（昭和10）年に新聞に掲載された「カピー」の広告である。この「カルピス朝食会」では「爽やかな井ノ頭の朝露を踏んで散歩に・・・ラジオ体操に胸一杯の涼気を吸って－軽いおいしい朝食を食べる！」という宣伝文句が添えられている。広告に記された朝食の献立では、特選サンドイッチや茶粥、佃煮、半熟卵が供され、食前と食後にメインとなるカルピスが2度振舞われていた。渋谷からの往復割引乗車券や井の頭公園内の動物園入場券が特典として加えられていた「朝食会」は企業の宣伝を超えて来園者を増やすことにも貢献していたものと考えられる。

また、1933（昭和8）年頃の井の頭公園駅前には井の頭線を運営する帝都電鉄が無料休憩所を営業していた⁴²⁾。この休憩所の設立経緯などを伝える資料は管見の限り確認できないが、井の頭公園駅を開業し、渋谷から直接公園への来訪者を呼び込もうとしていた帝都電鉄の意図が伺える。昭和初期に見られた企業によるこうした休憩所や直営喫茶店の開業は、井の頭公園の集客に影響を与えたものと考えられる。

2)「桜名所」としての案内書記載

先述の『遠足の栞』に記載されていたように、井の頭池周辺は田園風景を楽しみながら散策する場所であった。井の頭公園の開設後の公園利用も、東京市民の健康増進や学校遠足などが中心であった。こうした状況下の井の頭公園に桜の花見という新たな要素が加わったのは昭和初期であったと考えられる。

中央線沿線における著名な桜名所といえば玉川上水沿いに見られる小金井の桜であった。吉祥寺駅周辺や井の頭公園付近に目立った桜名所がなかったことは、井の頭公園開設後に鉄道会社が発行したパンフレット類からも読み取れる。こうしたパンフレットを見ると、吉祥寺付近で桜の紹介

があるのは井の頭公園の南方を流れる玉川上水沿いのみである（図10）⁴³⁾。井の頭公園や吉祥寺駅周辺で桜の紹介が見られる最初のパンフレットは、図11に示した1935（昭和10）年に国鉄東京鉄道局が発行した「春もゆる野山に光をわけて」である。このパンフレットとほぼ同様の内容を持った1940（昭和15）年発行のパンフレット⁴⁴⁾では吉祥寺駅に桜の紹介がないことから、この頃には吉祥寺駅で下車し、井の頭公園の桜を見ることが行われるようになったものと考えられる。また1931（昭和6）年に発表された版画家川瀬巴水の「井之頭の春の夜」では、井之頭池畔に並ぶ桜が咲き誇っている様子が描かれており、現代の



図10 1927（昭和2）年発行「東京郊外鉄道電車沿線案内」
井之頭公園付近の描写
（個人蔵）

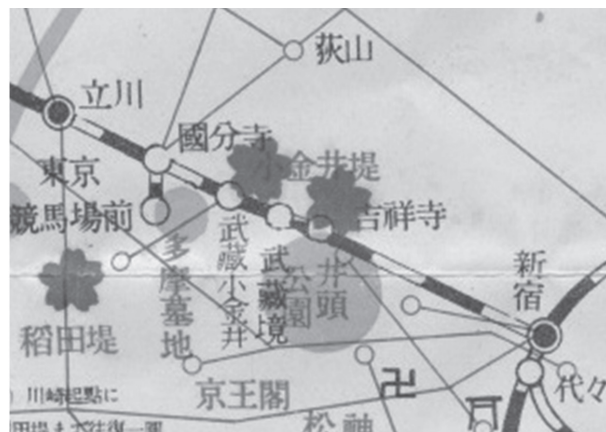


図11 東京鉄道局発行
「春もゆる野山に光をわけて」パンフレット
井之頭公園付近の描写
（個人蔵）

井の頭公園の桜と同様に池畔に桜が並ぶ景観が見られたことが伺われる。

観光パンフレットではないが、1954（昭和29）年に郷土教育全国連絡協議会によって編集された『京王風土記』では、「井之頭公園の駅を降りると、池のほとりには桜が一面に植えてあり、春の花どき、初夏の新緑、夏の青葉、秋の紅葉と木々はそれぞれに化粧を変え、池の面に姿をうつして、私たちを一年中迎え入れてくれる。」⁴⁵⁾と紹介されている。図11のパンフレットとは年代が隔たっているが、昭和10～20年代には池畔の桜が定着していたことが読み取れ、井の頭公園が現在のような桜名所として定着するのは1935（昭和10）年以降であったと考えられる。

3) 寮生による花見行事

井の頭公園で花見を行ったという記録は少ないが、1952（昭和27）年5月に大田区千束から三鷹市牟礼⁴⁶⁾に移転した高知県出身者の学生寮「土佐寮」の記録には、寮の伝統行事「観桜会」が行われていた記述がある⁴⁷⁾。この記録によると、寮が牛込区砂土原⁴⁸⁾にあった1908（明治41）年に「観桜会」を行った記録があり、1918（大正7）年には小金井で「観桜会」を行ったことが記載されている。牟礼に移転した後の土佐寮でも、「観桜会」は「新寮生歓迎の意味をこめ三役が中心となって開催し全員が参加する」行事であるとして継続しており、「新寮生は先輩の顔や名前・他の新寮生などを知り土佐寮気質を肌で感じ」ていたという⁴⁹⁾。1960年代までに三鷹市牟礼の井の頭地区には複数の学生寮や社員寮が立地しており⁵⁰⁾、少なからず同様の行事が行われていたことが想定される。こうした寮生らによる花見行事は、井の頭公園の桜名所化を促進し、定着させることに一定の役割を果たしていたものと考えられる。

V おわりに

本稿では井の頭公園の設立経緯をふまえた上で、公園の利用形態の変化や地域における観光資源化の過程について考察をしてきた。考察の結

果、以下の点が明らかになった。

1点目は、井の頭公園開設当初の公園利用は、学校の遠足行事や、東京市民の健康増進を目的としたものであり、鉄道会社による割引制度や東京市との共催による催しの企画が行われていたことである。

2点目は、井の頭公園の開設後、周辺の武蔵野村吉祥寺と三鷹村牟礼の人々によって数々の「献木願」や「公園使用願」などが東京市に提出され、植栽や茶店等の出店が行われていたことが明らかになった。献木願の中には多数の桜を井の頭池畔に植えることを願い出たものもあり、今日の桜名所としての井の頭公園の基礎になっていると考えられる。また、茶店などでの「公園使用願」では、井の頭公園開設以前から井の頭池周辺に出店していた茶店からの使用継続を求める申請が多かったことがうかがえた。さらに井の頭公園にプールなどの設備が整い来園者が増加してくると、それに合わせて店を拡張しようとする届け出もあり、東京市では対応に苦慮していた様子もうかがえる。

3点目には、井の頭公園が今日のように桜名所として認識されるようになったのは昭和10年代から昭和20年代にかけてであることが明らかになった。井の頭公園に桜が大量に献木されてから、鉄道の沿線パンフレットなどで最初に吉祥寺駅周辺に桜名所の記載が行われるのは1935（昭和10）年に東京鉄道局によって発行されたものであった。それ以降昭和20年代にかけて三鷹村牟礼の井の頭地区では学生や独身会社員向けの寮が多数立地したことから、寮生同士の親睦を目的とした花見行事が盛んに行われたことが桜名所として井の頭公園が認識される契機となったと考えられる。

井の頭公園が開設された時期は、先述の通り大正デモクラシーの時代であり、社会情勢を反映して日比谷公園をはじめとする各地の公園は、しばしば民衆の政治的意思表示の場として利用された⁵¹⁾。また、公園の「公共性」が見出された時期もこの頃であり、1907（明治40）年には大阪の

浜寺公園において私人の別荘建設が問題化している⁵²⁾。こうした時代背景のもとに開設された井の頭公園は、都心から離れた郊外公園としての役割が期待され、東京市民の行楽や憩いの場として発展してきた。また日比谷公園では設計段階から営利施設としての茶店類が公園に相応しいものではないとして忌避されていたが、井の頭公園では開設当初から多数の茶店が存在し、公園利用者の便に供していた。これは1875（明治8）年に公園を管轄していた内務省が東京府に対して公園の維持管理費は公園の借地料や使用料を充てるよう指令を出していることとも合致している。1873（明治6）年に整備された最初の都市公園である浅草・芝・上野・深川・飛鳥山の五公園以降、日比谷公園のように「洋風」の公園が求められていたなかで、井の頭公園はむしろ地域の住民による茶店の出店や桜などの献木を盛んに受け入れることで賑わいが増していったと考えられる。このことは、隣接する吉祥寺駅周辺の商業地域に変化をもたらし、市街化にも影響を与えた。公園化以前の井の頭弁天への参詣道は井の頭池の南岸から東進して江戸に到達するものであったが、公園開設後は鉄道利用の公園利用者を積極的に誘致していたため、吉祥寺駅北口から鉄道線路沿いに西に進み踏切を越えて井の頭公園に通じる府道180号線が公園への主要な接続道路となった⁵³⁾。当時狭隘であった府道180号線に多くの歩行者が押し寄せ、自動車交通との安全の問題が発生し、東京府は道路拡幅と歩道の整備の必要性に迫られたのである。拡幅された新たな道路沿いには多くの商店が立ち並び、駅周辺の商業地域は、これを機に面的に拡大していった。吉祥寺駅の開設直後は地域住民有志が協力して駅北口から五日市街道まで北上する駅前通りが唯一の駅前商店街であったが⁵⁴⁾、井の頭公園が開設された大正期から昭和初期にかけて、吉祥寺駅周辺には複数の商店街が形成され、商店街ごとに特売日や催事を企画するなど活発な商業活動が行われていた⁵⁵⁾。井の頭公園の開設と鉄道利用による公園利用者の増加は吉祥寺駅

周辺の商店街景観を変えるほどの影響があったと考えられる。

本稿では、井の頭公園における地域住民の積極的な投資行動と、公園の観光資源化との関係を検証してきた。井の頭公園の観光資源化は、欧風化を目指し大正デモクラシーの時代に象徴的に政治的な活動の場とされた日比谷公園などとは大きく異なる経緯をたどった結果である。しかし一方で、公園の開設以降大きく変わりゆく植生や公園の景観は、「郷土風景」の論争にも影響を与えた。造園家の小寺駿吉は「井の頭公園は、既に「施設」の過剰と来園者の過剰とによって「自然」を殺し、知性を失いかけている⁵⁶⁾」と評し、公園景観の在り方に問題提起を行っている。こうした井の頭公園の景観変化による影響や郷土風景に関する論争については稿を改めたい。

注および参考文献

- 1) 丸山宏『近代日本公園史の研究』思文閣出版、1994、21-43頁。
- 2) 白幡洋三郎『近代都市公園史の研究－欧化の系譜－』思文閣出版、1995、182頁。
- 3) 前掲2、198頁。
- 4) 前掲1、84頁。
- 5) 越澤明『東京都市計画物語』筑摩書房、2001。石田頼房『日本近現代都市計画の展開1868-2003』自治体研究社など。
- 6) 丸山宏「京都円山公園成立前史」造園雑誌（47）5、1984、7-12頁。丸山宏「円山公園の拡張」造園雑誌（48）5、1985、1-6頁。
- 7) 小林昭裕「円山公園にみる都心郊外山麓の公園成立と変遷に関する社会文化的視点からの史的考察」ランドスケープ研究79（5）、2016、425-430頁。
- 8) たとえば松本至巨「福島市における都市公園の発達過程と地域的差異」地域調査報告19、1997、83-91頁などがある。
- 9) 中川祐希「近代都市における公共空間の社会的な生産－京都駅前広場を事例として－」日本

- 地理学会発表要旨集87, 2015, 168頁. 尚, 本稿脱稿後, 中川祐希「国家儀礼を契機とした景觀形成－近代期における京都駅前を事例として－」人文地理69-3, 2017, 373-394頁が刊行された.
- 10) 貝塚爽平『東京の自然史 増補第二版』紀伊国屋書店, 1979, 67-68頁.
- 11) 前島康彦『井の頭公園』郷学舎, 1980, 21頁.
- 12) 前掲11, 23頁.
- 13) 国立国会図書館デジタルコレクション, 請求番号WA21-11.
- 14) 国立国会図書館デジタルコレクション, 請求番号W245-20.
- 15) 前掲11, 32-33頁.
- 16) 前掲11, 36頁.
- 17) 前掲11, 36-38頁.
- 18) 小寺駿吉「井之頭恩賜公園」造園研究16, 1936, 1-23頁.
- 19) 前掲11, 39頁.
- 20) 前掲11, 43-49頁.
- 21) 前掲18, 2頁.
- 22) 1921(大正10)年に池水を利用した水泳場, 1929(昭和4)年にボート場, 1933(昭和8)年に水泳プールを設置した. また, 1942(昭和17)年には御殿山に井の頭文化園が開設された.
- 23) 1913(大正2)年, 東京市長坂谷芳郎は鉄道院総裁に宛てて中央線の電化, 笹塚－調布間で同年に開通した京王電気軌道の井の頭恩賜公園方面への延伸と東京市の市電との接続を求める要望書を提出している. 「井之頭公園被設置候之東京府知事乃関係郡長町村長其他ニ対スル報告ノ件 案二」『大正2年土地 公園地 第1種 東京市冊の1』所収(東京都公文書館所蔵史料番号: 301.C5.12)
- 24) 『井之頭恩賜公園絵葉書』大盛寺蔵版, 個人蔵.
- 25) 当時の玉川上水は水量が多く, しばしば水難事故が発生していた. 1948(昭和23)年に太宰治が入水した場所もこの付近だと考えられている.
- 26) 現在の東京都港区芝付近.
- 27) ①財団法人戸板学園『創立三十季記念誌戸板学園』共立社印刷所, 1931, 46-47頁. ②戸板学園八十周年記念誌編集委員会編『戸板学園－八十周年記念誌』金羊社, 1982, 66-75頁.
- 28) 東京女子高等師範学校附属高等女学校編『遠足の栞』東京女子高等師範学校附属高等女学校校友会, 1919, 88-94頁. 国立国会図書館デジタルコレクション, 請求番号388-184.
- 29) 点灯前は日没前のことと考えられる.
- 30) 前掲28, 89頁.
- 31) 東京府青山師範学校付属小学校教育研究会編『東京府郷土教育資料 郊外編』正光社出版部, 1930, 159-163頁. 国立国会図書館デジタルコレクション, 請求番号特234-427.
- 32) 1935(昭和10)年8月2日朝日新聞夕刊掲載広告「カルピス朝食会」.
- 33) 「第五二号」『大正7年土地 公園地 第1種 4冊ノ4』(東京都公文書館所蔵 史料番号: 302.B7.5)
- 34) 「大正六年七月六日議決 第五百七十三号 井ノ頭恩賜公園地使用許可ノ件」『大正六年土地 公園 第一種 五冊ノ二』(東京都公文書館所蔵 史料番号: 302.D6.4)
- 35) 現在の東京都昭島市郷地.
- 36) 現在の東京都新宿区柏木.
- 37) 現在の東京都千代田区神田鍛冶町付近.
- 38) 現在の東京都中央区日本橋室町.
- 39) 「大正十一年二月廿七日提案 建物増設願供覧ノ件」『大正十一年土地 公園 第一種 四冊ノ二』(東京都公文書館 史料番号: 304.B4.14)
- 40) カルピス株式会社ホームページ「企業情報 社史・沿革 1910年代～1930年代」, <http://www.calpis.co.jp/corporate/history/chronology/index.html> (2017年10月23日 最終

閲覧)

- 41) 現在の東京都文京区千駄木。同社は設立の翌年、東洋附豊多摩郡渋谷町（現在の東京都渋谷区の一部）に移転した。
- 42) ぶんしん出版編『井の頭公園100年写真集』ぶんしん出版、64頁。
- 43) 現在、この付近の玉川上水沿いで桜が見られるところのごくわずかであり、かつての桜名所の面影は確認できない。
- 44) 東京鉄道局発行パンフレット「国民精神総動員 春光を浴びて野外へ」。路線図の記載内容に加え4月1日以降通行税が加算される注記があることから1940（昭和15）年発行と判断した。
- 45) 郷土教育全国連絡協議会編『京王風土記』京王帝都電鉄、1954、69頁。
- 46) 三鷹町は1950（昭和25）年に三鷹市となった。
- 47) 土佐寮三十周年記念誌寮史編集委員会編『萬里横行』（財）土佐育英協会、1982、127頁。
- 48) 現在の東京都新宿区神楽坂。
- 49) 前掲47、51-52頁。
- 50) 井之頭町会発行2,000分1地図「町会十周年記念 三鷹市牟礼井之頭町会地域図」1963。
- 51) 前掲1、84頁。
- 52) 前掲1、79頁。
- 53) 高橋珠州彦「昭和初期東京吉祥寺における道路拡幅事業と駅前商店街の変化－家屋所有者の役割に着目して－」文教大学生生活科学研究第39集、2017、41-51頁。
- 54) 高橋珠州彦「大都市近郊地域の市街化と根生いの人々の転業過程－明治後期から高度経済成長期までの武蔵野市吉祥寺地区を事例として－」都市地理学vol.7、2012、1-15頁。
- 55) 高橋珠州彦「東京吉祥寺における都市観光資源としての昭和戦前期広告群」歴史地理学野外研究第17号、2016、51-57頁。
- 56) 小寺駿吉「「郷土風景」批判」造園雑誌 1（1）、1934、7-18頁。

